

北極評議会のゆくえ最新情報：ロシア脱退か、ロシア+BRICS 諸国の拡大会議か？

1. 「北極評議会、作業を再開：ロシアに脱退を促すかもしれない」（6月17日）

2022年6月9日、ロシア以外の北極圏7カ国は、[北極評議会の一部の作業を再開する共同声明を発表](#)した。この記事は、この声明をうけて行われた、ブルッキングス研究所の Jeremy Greenwood 氏へのインタビュー記事である。なお同氏は、[5月にも北極評議会の今後に関する記事](#)を書いている。北極圏7カ国が、北極評議会の活動を限定的に再開することを表明した後、ノルウェーの高級北極実務者（SAO）は、予定（2023年5月）よりも早くに北極評議会の議長国を引き継ぐ見通しを否定した。ではロシアのリーダーシップなしにどのように評議会を再開できるのかについて Greenwood 氏は以下のように述べている。

この北極圏7カ国の判断は、妥当である。ノルウェーが早期に議長国を引き受けるかどうかに関わらず、7カ国には、以前に8カ国で決定した計画に基づき、作業を継続する権限がある。

ロシアが北極評議会のコンセンサス方式を逆手にとり、7カ国で作成した成果物を北極評議会の名前で刊行することに反対する懸念があるものの、その場合は、個々の加盟国や常時参加者の名前で刊行すればよく、ロシアの反対は問題にならない。またロシアが参加しない科学的調査は、質が低くなることは疑いないが、多くの北極評議会の作業は、ロシアがいなくても入手可能な既存の研究や気候変動のデータに関する勧告や分析であるため実際的な問題もない。このように7カ国で作成した成果物であっても、北極政策コミュニティーにとって優れた価値がある。

とはいえ、ロシアが北極7カ国のこうした措置を真剣に受け取らないとすれば、それは残念である。駐米ロシア大使は、北極圏7カ国声明の後、即座に、[ロシア抜きで北極評議会の作業を進めた場合の「法的帰結」について警告](#)した。しかし、不満を表明する以外にロシアに利用可能な「法的」な帰結が多くあるとは思えない。また北極協力にとって望ましくない可能性があるが、ロシアはいつでも北極評議会を脱退できる。しかし、その場合でも、脱退は「法的帰結」それ自体ではない。

もし北極圏7カ国が、既に8ヶ国で決定した計画通り作業を継続し、仮にロシアの反対に遭えば、北極評議会のロゴなしに成果物を刊行するならば、良い方向に進んでいると考える。反対に、7カ国が新たな北極評議会に代わる組織をつくるのではなく、北極評議会を事実上継続し、成果物についてロシアと協議もしないのであれば、ロシアは正式に脱退せざるを得なくなるかもしれない。

原文情報：Trine Jonassen “Might push Russia to withdraw from Arctic Council” High North News (17 June 2022) accessed 23 June 2022 <<https://www.highnorthnews.com/en/might-push-russia-withdraw-arctic-council>>

2. 「ロシア外務省：ロシアは非北極圏国との北極協力を歓迎」（6月17日）

この記事は、ロシアの政府系の北極に関するニュースサイト The Arctic に掲載されたものである。6月16日にサンクトペテルブルク国際経済フォーラムで開催されたセッション「北極における持続可能な発展のための国際協力」におけるロシアの高級北極実務者（SAO）会合議長である Nikolai Korchnov

大使の発言をまとめたものである。同セッションの様子は、6月22日までは[フォーラムのウェブサイト](#)で閲覧可能であったが、23日現在閲覧できなくなっている。同氏は、概ね以下のようなことを語っている。（一部、記事からではなく、ビデオ閲覧で得た情報について、文字を小さくして加筆している。）

北極は、世界に開かれつつあり、アジアなどから益々多くの旅行客が訪れている。我々はこのトレンドを歓迎する。ロシアはまた北極の持続可能な発展の利益のため、非北極圏国の友人が参加する広範な国際パートナーシップの創設を歓迎する。

北極は北極海航路を含んでおり、ロシアはこの航路の発展に取り組んできた。また北極は、とりわけエネルギー転換の文脈においてその経済的重要性を高めている。

北極評議会について、ロシアはその形式ではなく、実質を重んじてきた。ロシアは、北極協力の形式に拘るものではない。北極評議会は、数ヶ月前までは適切でロシアの利益とも合致していた。ロシアの関与なくして北極評議会は成り立ち得ない。他の北極圏7カ国は、北極評議会を代替する組織の設立を求めてはいない。なぜなら、誰も現在の状況が一時的なものだとよく分かっているからである。我々は、いずれこの状況が解決し、協力が継続できるようになることを期待する。現在ロシアは、2021年5月のレイキャビック閣僚会合での合意を実施する機会を待ち望んでいる。これらのプロジェクトは、北極圏先住民に資するものである。

ブラジル・ロシア・インド・中国・南アフリカが参加するBRICS諸国は一部北極評議会のオブザーバーであり、これらの諸国が参加することにより北極評議会は真にグローバルとなる。いつぞや、世界貿易機関(WTO)の元事務局長は、WTOは中国なくしてグローバルになり得ないと言っていた。同じことである。

ロシアは、北極が建設的な協力の地域であるとみている。同時に北極における軍事活動の国際化を懸念する。しかし、すべての国は、緊張をエスカレートさせない良識があると信じている。

【司会からの質問に応える形で】アジア諸国は、北極圏における新たな技術の応用に関心を持っている。北極圏は、水素燃料だけで稼働する新北極観測基地「スノーブレイク」の活用、パリ協定の先端的な実施プロジェクトの応用の場、そしてカーボンニュートラル経済の実験場なのである。

【パネリストとして参加していたロシア北極南極研究所のアレキサンダー・マカロフ所長は、北極における科学協力が多くの研究機関との間で停止状態であるが、その穴をアジア諸国、特に韓国と日本が埋めてくれている、と発言。】

原文情報：“Russian Foreign Ministry: Russia welcomes Arctic cooperation with non-regional countries” (17 June 2022) accessed 23 June 2022

<<https://arctic.ru/international/20220617/1002151.html>>

文責：ArCS II 国際法制度課題研究分担者・PCRC 研究員 稲垣 治
2022年6月24日